KODANSHA

講談社選書メチエ
134

# 芭蕉 二つの顔

田中善信

## 俗人と俳聖と

座禅を組み、数珠を携えて旅へ。俗世を捨てた孤高の人・芭蕉。それはしかし、晩年の姿だった。処世の才に恵まれ、ユーモアに長け、伊達を好んだ若き日。

SENSHO METIER

# 芭蕉 二つの顔

## 俗人と俳聖と

田中善信

講談社選書メチエ

SENSHO METIER

芭蕉＝二つの顔

一九九八年七月一〇日第一刷発行　一九九八年一〇月二六日第四刷発行

著者　田中善信

© Yoshinobu Tanaka 1998

発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二―二一　郵便番号一一二―八〇〇一
電話（編集部）〇三―三九四三―二六一二　（販売部）〇三―五三九五―三六二六
（製作部）〇三―五三九五―三六一五

装幀者　山岸義明
印刷所　慶昌堂印刷株式会社　製本所　大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、学術局選書出版部あてにお願いいたします。
R〈日本複写権センター委託出版物〉本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-258134-5（選書）　Printed in Japan
N.D.C.911.32　254p　19cm

目次

芭蕉＝二つの顔

プロローグ　芭蕉空白の四〇年をうめる――5

第一章　伊賀での少年時代

1　芭蕉はどこで生まれたか――18
2　「農人」としての生活――厳しい身分格差のなかで――30

第二章　武家奉公へ

1　「料理人」としての奉公――48
2　蟬吟の寵愛――60
3　才気縦横――無名の俳人時代――79

第三章　日本橋在住時代

1　名主代行として――手跡・算勘の心得――90
2　神田上水の委託工事――99

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

3 浚渫工事——芭蕉の処世の才 108

第四章 江戸俳壇に躍りでる——「笑い」の俳諧師

1 談林俳諧師として 118
2 万句興行の成功 127

第五章 若き日の妾・寿貞

1 江戸時代の妾 136
2 寿貞の境遇 149

第六章 桃印の謎

1 なぜ桃印は句を残さなかったのか 166
2 芭蕉が日本橋を離れたとき 180
3 閉関の説——芭蕉の苦悩 193

第七章　転生
1　孤独と貧――世俗との絶縁――200
2　一所不住の生活――仏頂和尚との出会い――208
エピローグ　人間芭蕉の四〇年――234
芭蕉略年譜――244
参考文献――249
あとがき――251
索引――253

# プロローグ――芭蕉空白の四〇年をうめる

## 俳諧の聖

万葉歌人の柿本人麻呂は、『古今和歌集』の序文で「歌の聖」と称された。聖とは、神のごとく卓抜した才能をもつ人をいうのであろう。これにならって松尾芭蕉は俳聖と呼ばれた。俳聖とは俳諧の聖のことである。

『千鳥墳』（宝暦一〇年〈一七六〇〉序）や『俳諧耳底記』（宝暦末年ごろ刊）に、芭蕉を俳聖とよんだ例があるから、江戸時代、すでに芭蕉を俳聖とよぶ人がいたことがわかるが、俳聖という呼称が一般的になるのは近代になってからである。今日では俳聖という言葉はあまり使われず、芭蕉を旅の詩人とか漂泊の詩人などというのが一般的になっているが、これは芭蕉にたいする評価が変わったのではなく、俳聖という古めかしい言葉が現代の人びとの感覚に合わなくなった、ということであろう。芭蕉を表現する言葉が変わっても、芭蕉の評価は今後も変わることはあるまい。

芭蕉の伝記研究はすでに江戸時代からはじまっているが、今日にいたっても空白のままに残されている部分が多い。私たちが芭蕉について知っている事実は、ほとんどがその晩年に集中する。

本書では、あまり知られていないその前半生における空白部分をわずかでも埋めたいと考えている

が、本題に入るまえに、芭蕉の伝記を通説にしたがって概括しておきたい。

**晩年の半分を旅に過ごす**

われわれがよく親しんでいる芭蕉という名は、彼が三八歳のとき、門人が住まいの庭に芭蕉の木を植えてくれたことに由来する。これにちなんで芭蕉は自分の住まいを芭蕉庵と号し、またみずからも芭蕉と称するようになった。

芭蕉は正保元年（寛永二一年〈一六四四〉一二月一六日に正保と改元）、伊賀国上野の赤坂町に生まれた。生家は松尾氏を称したが、その生業は不明である。次男だった彼は武家奉公に出た。その芭蕉が江戸に出たのは二九歳のときである。江戸に出るまえに『貝おほひ』という本をつくり、地元上野の菅原神社に奉納した。江戸へ出た後、芭蕉は桃青と号した。

芭蕉は「旅の詩人」といわれるが、「旅の詩人」の生涯は、貞享元年（一六八四）、四一歳の秋八月に郷里へ旅立ったときからはじまる。いわゆる『野ざらし紀行』の旅である。このときの旅の直接の動機は母の墓参であったと思うが、たんなる墓参の旅に終わらず、八ヵ月におよぶ長期の旅になった。

以後、死没する五一歳までの一〇年間のうち、彼は約半分の四年七ヵ月を旅に過ごすことになる。

数多い芭蕉の句のなかでもっとも人口に膾炙した句といえば、貞享三年に作られた「古池や蛙飛び込む水の音」という句である。この句は江戸時代中期以後、蕉風俳諧の神髄を表している作として喧

伝されたが、蕉風俳諧の神髄を表しているかどうかはともかく、平明な表現のなかに余情をたたえた句作りは、蕉風俳諧の特性をよく表しているといえよう。

貞享四年の冬、芭蕉はふたたび故郷に旅立った。いわゆる『笈の小文』の旅である。この年の五月、藤堂藩では国外にいるすべての領民にたいして、一時帰国するようにという法令を出しているから、芭蕉の帰国はこれにしたがったものであろうが、このときも、たんなる所用の旅に終わらず、近畿地方から須磨・明石を巡歴して約一〇ヵ月におよぶ長期の旅になった。

**住まいを人に譲り『おくのほそ道』の旅にでる**

元禄二年（一六八九）の三月に、芭蕉の生涯における最大の旅である奥州・北陸の旅に出立した。『おくのほそ道』の旅である。このとき、芭蕉は四六歳であった。この旅では住まいを人に譲って出立しているから、芭蕉は場合によっては江戸にもどらない心積もりをしていたと思われる。この旅で芭蕉に随行した門人の河合（本姓は岩波）曾良は詳細な日記（『曾良旅日記』と呼ばれている）を書き残しており、旅中の芭蕉の動静がかなり詳しくわかる。この日記が広く世に知られるようになったのは昭和一八年だが、これによって『おくのほそ道』に多くのフィクションがあることが判明した。

この旅で生涯の絶唱ともいうべき「夏草や兵どもが夢の跡」「閑さや岩にしみ入る蟬の声」「荒海や佐渡によこたふ天の河」などの名句が生まれたが、なんといってもこの旅の最大の成果は『おくのほそ道』という作品であろう。

「おくのほそ道」の旅（『芭蕉翁絵詞伝』義仲寺蔵）

『おくのほそ道』は三月下旬に千住を出発するところからはじまり、八月下旬に美濃国大垣（岐阜県大垣市）に到着したところで終わっているが、このときの旅はこれで終わったわけではなく、その後、元禄四年一〇月下旬まで芭蕉は近畿地方に滞在した。近畿滞在中は、彼は郷里の伊賀上野・京都・湖南（大津・膳所）で過ごした。この間に上野には四度帰省しているが、元禄三、四年には、いずれの年も一月上旬から三月下旬までの約三ヵ月間滞在している。京都にはたびたび行っているが、あまり長期の滞在はない。

やや長期にわたって滞在したのは嵯峨の落柿舎で、ここに芭蕉は前後一七日間宿泊し、そのあいだに『嵯峨日記』を書いた。落柿舎は向井去来の別荘だが、彼は天皇や皇族の診療にもあたった向井元升という医者の次男で、芭蕉の信頼が厚かったことはよく知られている。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

落柿舎を出た後は、医者の野沢凡兆宅を京都における主な宿泊場所としたらしい。凡兆は去来とともに『猿蓑』を編集して非凡な才能を発揮したが、同書刊行後まもなく、芭蕉から離反して急速に精彩を失った。

### 浮雲無住の境涯

湖南では膳所の義仲寺の草庵を利用することが多く、元禄三年および元禄四年の正月を芭蕉はこの草庵で迎えている。義仲寺は木曾義仲を供養した場所で、当時は粗末な庵があるだけの無住の寺（芭蕉は木曾塚と呼んでいる）であったらしく、芭蕉はこの庵を湖南における活動の拠点とした。膳所藩の重臣であった菅沼曲翠が提供してくれた国分山の幻住庵にも、芭蕉は四ヵ月ほど滞在したが、この滞在中に俳文の最高傑作といわれる「幻住庵記」の草案が成った。湖南滞在が長期にわたったことから、ここに多くの門人ができて近江蕉門が形成され、大津・膳所は蕉門の牙城ともいうべき地域になった。

元禄四年の正月ごろ、義仲寺に芭蕉の住む庵を建てる計画が膳所藩士の水田正秀によって進められていた。これは以前からあった草庵を取り壊して、その場所に新たに庵を建てる計画であったらしい。この計画にたいして芭蕉は「拙者浮雲無住の境涯大望故、かくのごとく漂泊いたし候」（正秀宛書簡）と述べて、新築の庵はこの気持にかなうようなものにしてほしいと正秀に頼んでいる。つまりあまり立派なものを作ってくれるな、というのである。定住の場をもたない「浮雲無住の境涯」が芭蕉

の理想であったことがわかる。

この庵は元禄四年の三月に完成したが、芭蕉がはじめてここに入ったのは六月下旬であった。この庵は無名庵となづけられた。芭蕉はこの年の九月下旬に江戸に向けて出立したから、彼が無名庵を利用したのは三ヵ月弱ということになる。

## 三〇〇人が葬儀に参列

元禄四年一〇月、芭蕉は江戸に帰った。深川の芭蕉庵を人に譲って『おくのほそ道』の旅に出立したから、江戸に帰った芭蕉には戻る家はなく、しばらく日本橋橘町の借家に仮住まいをすることになった。翌年の五月に、以前の住まいの近くに新しい芭蕉庵ができたので、橘町の借家に従弟の桃隣を残し、芭蕉はこの庵に入った。新築の庵は部屋数三つのささやかな建物で、建築費はほとんど門人の杉山杉風が出したらしい。

元禄七年（一六九四）五月一一日、芭蕉は身辺の世話をさせていた次郎兵衛（二郎兵衛とも。本書は次郎兵衛で統一する）をともなって帰省の途についた。元禄四年一〇月に江戸に戻ってから、約二年半ぶりの旅であり、結局これが芭蕉の最後の旅になった。この旅で芭蕉は、素龍が清書した『おくのほそ道』を携えていた。『おくのほそ道』の成立にかんしては不明の点も多いが、素龍の清書が完成したのはこの年の四月である。このとき携行した『おくのほそ道』は、芭蕉の形見として兄の半左衛門のもとに残された。八月に、上野の門人たちの出資により、半左衛門の家の庭に芭蕉のための庵が

建てられて、これも無名庵と名付けられた。

大坂（大阪。江戸時代には大坂と表記）へ出た九月一〇日から芭蕉は病に冒された。その後、小康を得たが、九月二九日には下痢が激しくなって病床に臥すことになった。病状は日を追って悪化し、芭蕉は一〇月五日に南御堂前の閑静な貸座敷（花屋仁右衛門の貸座敷と伝えられる）に移されて、一〇月一二日にここで病没した。享年は五一歳であった。遺言にしたがって芭蕉の遺骸は義仲寺に葬られた。一四日に葬儀が行われたが、其角の「芭蕉翁終焉記」（『枯尾華』所収）には「京・大津・膳所の連衆・披官（召し使い）・従者迄も、この翁の情を慕へるにこそ、まねかざるに馳せ来るもの三百余人なり」と記されている。其角自身もたまたま近畿巡遊の途中、芭蕉の死を知り、この葬儀に参列した。

**東海道を旅しなければ……**

以上がごく大ざっぱな芭蕉の生涯の概観である。芭蕉はよく「旅の詩人」といわれるが、彼が「旅の詩人」といわれるような生活を送ったのは、右に述べた通り、『野ざらし紀行』に出立した四一歳から死没した五一歳までの晩年の一〇年間だけである。しかし、この一〇年間はまことに実りの多い歳月であった。

『野ざらし紀行』の旅において蕉風俳諧を確立した芭蕉は、その後、骨身を削る思いで俳諧の新風を求めつづけた。『おくのほそ道』の旅によって芭蕉の俳諧は一新したと去来が述べているように、旅

は芭蕉にとって、俳諧の道をきわめ、新風を模索する場となった。芭蕉自身、門人の許六（きょりく）に「東海道の一すじもしらぬ人、風雅におぼつかなし」（『韻塞（いんふたぎ）』所収「風狂人が旅の賦」）と語っている。東海道を旅したことのないような人は、俳諧の上達はおぼつかない、という意味である。このように、芭蕉の俳諧に旅が重要な意味をもっていたから、新風を求めて旅に生きる俳諧の求道者という芭蕉のイメージが作られた。

晩年の芭蕉はたしかに、そのイメージにふさわしい生き方をしたといってよいと思う。俳聖とよばれたように、芭蕉が俳諧においてすぐれた業績を残したことはいうまでもないが、晩年の彼が人間的にも高潔な人格者であったことは彼の行動からもうかがえるし、門人の証言もある。

**空白の四〇年間**

しかし、そうした境地にいたる以前の芭蕉がどのような生き方をしていたのか、ほとんどわからない。芭蕉といえども、はじめから偉大な人物であったはずがないと思う。ごく普通の子ども時代があったはずであり、血気盛んな青年時代があったはずだと思う。だが残念ながら、四〇歳までの彼の生涯を解明する資料はあまりにもとぼしい。芭蕉の生涯の事跡は、専修大学教授阿部正美氏の『新修芭蕉伝記考説 行実篇』（一九八二年、明治書院）と元中央大学教授今栄蔵氏の『芭蕉年譜大成』（一九九四年、角川書店）に網羅されているが、四〇歳までの事跡の占めるページ数は、『伝記考説』が全六七九ページのうちの八八ページ、率にして一三パーセント弱、『年譜大成』は全四五三ページのうちの五

六ページ、率にして一二パーセント強である。

芭蕉の子ども時代のことは、何ひとつわからないといってよい状況である。明暦二年（一六五六）、芭蕉が一三歳のときに父が没したことは、伊賀上野の芭蕉研究家菊山当年男氏によって明らかにされたが、父の生業や松尾家の経済状態などはいまだに不明のままである。松尾家は兄の半左衛門が継いだが、半左衛門の生業を記した文献は皆無である。芭蕉が藤堂新七郎家に仕えたことは江戸時代の文献にも記されているが、仕えるようになった時期は不明であり、仕事の内容についてもまだ定説といえるものがない。

寛文一二年に芭蕉が江戸へ出たことは江戸時代から知られていたが、だれを頼って江戸へ出たのかいまなお判然としない。江戸へ出てから彼が神田上水の水道工事にかかわっていたことは、すでに江戸時代の文献に記されているが、それはアルバイト程度の仕事であったというのが現在の通説である。水道工事の仕事がアルバイト程度のものであったとすれば、芭蕉は別の仕事で生計を立てていたはずだが、それについては何もわからない。延宝三年（一六七五）、三二歳ごろから芭蕉の俳諧活動をたどることができるが、実生活にかんしては延宝年間は依然として空白のままだといってよい。

芭蕉の事跡がはっきりしてくるのは、四一歳の『野ざらし紀行』の旅以後である。

### 三つの発見

このほとんど空白といってよいほどの四〇歳までの人生だが、明治以後、この時期にかんする大き

な発見が三つあった。

その一つは明治四五年の『小ばなし』の発見で（「俳味」三巻一号）、このなかに、芭蕉の最後の旅に随行した次郎兵衛の母、寿貞が芭蕉の妾であったと記されていた。元禄八年（一六九五）に刊行された『有磯海』という俳書に芭蕉の寿貞追悼句があり、寿貞という女性が芭蕉と何らかのかかわりがあったことは早くから知られていた。その寿貞がじつは芭蕉の妾であったというのだから、学界が大騒ぎになったのも無理はない。

二つ目は昭和二二年の許六宛芭蕉書簡の発見である（『芭蕉研究』第三輯口絵）。これは元禄六年三月二〇日ごろに書かれたものだが、この書簡によって桃印という人物の境遇がかなりはっきりした。桃印の名は江戸時代の芭蕉伝にまったく見えず、彼の名が芭蕉研究者にはじめて知られたのは、昭和五年刊『俳人真蹟全集』に紹介された荊口宛芭蕉書簡（元禄六年四月二九日付）であった。

この書簡には「当春、猶子桃印と申すもの、三十余迄苦労に致し候ひて病死致し、この病中神魂をなやませ、死後断腸の思ひ止み難く候」と記されている。猶子とは甥のことであり、元禄六年の春に芭蕉の甥の桃印が亡くなったのである。この書簡には猶子と書かれているが、戦前から戦後にかけて俳文学界のリーダーであった頴原退蔵氏（昭和二三年没）は、桃印はじつは芭蕉の子どもではなかったのかと推定された（「芭蕉と寿貞」、『頴原退蔵著作集11』一九八〇年、中央公論社）。

ところが、昭和二二年に発見された許六宛書簡に、「旧里（郷里）を出て十年余二十年に及び候ひて、老母に二度対面せず、五、六才にて父に別れ候ひて、その後は拙者介抱にて三十三になり候」と



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.